

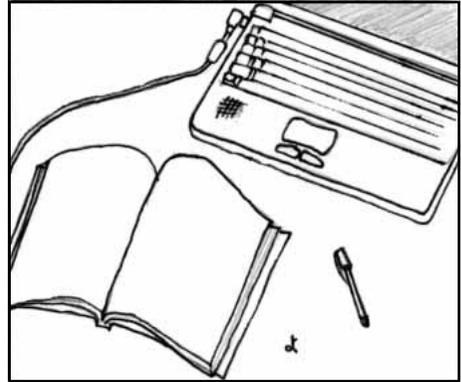


SINCE 1901 感謝と希望を  
日本女子大学・創立100周年

# 図書館だより

## 目次

ライブラリーで過ごす時間	出淵 敬子	1
「今、学生にすすめる本」特集(その2)		
島崎 恒蔵	小谷部 育子	2
植田 敬子	倉田 宏子	
成田 龍一	牧野田 恵美子	3
岩木 秀夫	峰村 勝弘	
つかつてみようインターネット(続々)	鈴木 学	4
情熱と理智の所産		
『青木生子著作集』紹介	後藤 祥子	6
本と歴史	新井 美香	7
私の図書館考	関本 真紀	
司書教諭科目の変更について	田中 功	8
OPAC 講習会を開催		



## ライブラリーで過ごす時間

出淵 敬子

レズリー・スティーヴンと云えば、あの浩瀚な『英国人名辞典』の初代編集長として、また小説家ヴァージニア・ウルフの父としても有名だが、その著書に『ライブラリーで過ごす時間』という文芸評論集がある。英語の「ライブラリー」という言葉は「図書館」ばかりでなく「書庫」「書齋」「蔵書」をも意味しているが、この本の序に代えてスティーヴンは、イギリスの文人達が「ライブラリー」をどう考えていたかを例証する四十余の詩や散文の短い抜粋を掲げている。

まず17世紀のフランス・ペーコンは、ライブラリーを「神殿」に譬え、美德に満ちてごまかしのない古の聖人の遺物が貯えられている所だと言う。古来の英知を集めた「神殿」としてライブラリーを尊び敬う心は、ともすると「本」が単なる商品や「物」と化す傾向のある現代にあっても失いたくないものである。「本」は目に見えない人間精神の労作の結果であることを思えば、自ずと尊敬の心が湧いてくる。

神殿とは対照的に、ライブラリーを肉屋に譬えた人もいる。「ライブラリーは肉屋のようだ。たくさん肉があるが、どれも生。腕利きの料理人がやって来て『あなたのお顔からお腹を空かせておいでだと分かります。お好みも分かっていますよ。ちょっと我慢して下さい。あなたがすばらしい食欲をお持ちだと納得させてあげましょう!』とってくれるまで、どんな人もそこでは食事になりつくことができない。」生肉ならぬ生の本の料理人という、さしずめ学者や教師を連想するが、本の消化不良を起こさないように、現代はさまざまな智恵と工夫を必要としている。とりわけ古典といわれる作品をいかにおいしく味付けして読者に供するかは私たちの重要な課題であろう。少々大げさに言えば、古典が生き延びることができるか否かは「料理人」の腕にかかっているのである。

19世紀の功利主義者ベンサムは「その人のライブラリーを見れば、人柄が分かる」といい、歴史家マコーレイは「読書を愛さない王様になるよりも、たくさんの本を持って屋根裏部屋にいる貧乏人になりたい」と言った。ロマン派の詩人バイロンは「独りぼっちで居るときに自分がいちばん幸せなのかどうかは分からない。しかし確かなことは、恋人と一緒にいるときでさえ、暫くすると必ずランプの灯と散らかって足の踏み場もないわがライブラリーが無性に恋しくなることだ。」と云ったという。アメリカのエマソンも「ライブラリーでは我々は魔術師によって紙と皮製の箱に閉じ込められた何百人もの親友たちに囲まれている。」と云った。いずれの言葉もライブラリーで過ごす時間の楽しみは奥深いことを改めて思い起こさせてくれる。

(図書館長・英文学科教授)

## 「今、学生にすすめる本」特集（その2）

**島崎恒藏**（被服学科教授）

**中谷宇吉郎**著 『科学の方法』 岩波新書 1958年

この本はかなり古い本であるので、現在入手可能かどうかはわからないが、機会があればぜひ読んでいただきたいと思う1冊である。著者の中谷宇吉郎（1962年没）は、随筆家としても有名であったが、もともとは物理学学者である。書名の中にある「科学」とは、もちろん自然科学を意味している。20世紀はもうすぐ終わるわけであるが、今世紀を一言でいえば、科学技術が加速度的に発展した時代であったといえるだろう。そのテンポの早さにもかかわらず、本書が未だに新鮮に感じられるのは、その内容がかなり本質をついたものであるからだろう。本書では、現代の自然科学の本質がどのようなものであり、またそれがどのような方法で現在のような姿に発展してきたのかが軽妙に述べられている。現代社会を支える科学の本質というものを一度よく考えてみることは、何を専攻している学生にとっても充分意義のあることだと思う。

**小谷部育子**（住居学科教授）

**西川祐子**著 『借家と持家の文学史』 三省堂 1998年

本書は、明治以降現代まで130年の間に書かれた大量の日本の文学作品 時には映画や漫画、建築論も含めて をテキストとした、壮大な近現代日本の都市住居史である。

戦前は都市の住宅の多くは借家であった。戦後は新しい家族制度と一律的な持家政策を背景に、両親と子供から成るいわゆる近代家族の住器としてのnLDKモデルと、そのモデルの個室の延長であるワンルームマンションが都市を覆っていった。しかし、家/家族/個人の関係が多様化する現在、住宅建築の分野でもnLDKモデルにかわる新しい住まい方や住まいのかたちが模索、提案されている。本書は、日本近代文学の主流といわれる私小説は、近代日本の家/家族/個人の関係と住まいの構造の変貌をトレースし、未来を予見させる宝庫でもあることを雄弁に語っている。

**植田敬子**（家政経済学科助教授）

家政経済学科にせっかく入学してきたのに、経済および経済学がとっつきにくいと思っている学生が多い。そういう学生にぜひ薦めたいのが、**高杉良**の経済小説である。事実に忠実でかつ重要な問題提起がなされているにもかかわらず、小説なので読みやすい本が多い。最近、面白かったのは『呪縛』（角川書店、1998年）という、第一勧銀の総会屋事件を題材にした本であるが、欠点はなかなか下巻が出ないことである。次に、国際金融市場の動きに興味を持っている人にぜひ読んでほしいのが、**ジョージ・ソロス**著『グローバル資本主義の危機』（日本経済新聞社、1999年）である。金融市場がはらむ不安定な性格と、放置しておくとか開放的な社会を崩壊させる危険性をもっていることを説いている。最後に卒業論文を書いている学生には、**野口悠紀雄**著『インターネット「超」活用法』（講談社、1999年）を薦めたい。論文に必要な資料の収集に役立つと思います。

**倉田宏子**（日本文学科教授）

**新・フェミニズム批評の会**編 『『青鞥』を読む』 学芸書林 1998年

初の女性だけの手による女性のための文芸雑誌『青鞥』（明44・9～大5・2）が、単なる文芸運動ではなく、以降の日本の女性解放運動の原点となったことはよく知られている。しかし、運動体としての『青鞥』の出発が、平塚らいてうという優れた個人の力だけではなく、日本女子大の俊秀の糾合を俟って初めて可能であったことを、果たしてご存じだろうか。男女雇用機会均等法が改正され、性によって差別されることのない社会への期待のふくらむ今日は、本学の多くの先輩たちが『青鞥』に結集した意味を、改めて問いなおす好機といえよう。さまざまなジャンルの文学、セクシュアリティ言説、メディア戦略などを解き明かし、『青鞥』を新しい光のなかに甦らせた本書の一読をお薦めする次第である。『青鞥』は、不二出版から復刻されている。

**成 田 龍 一** (現代社会学科教授)

近代日本の歴史像を描くときに、民衆史研究 という方法 = 立場がある。英雄や表舞台の人物ではなく、民衆 を主人公として、近代日本の歴史を描いてみようといい、1970年代に大きな影響力をもっていた。その民衆史研究の旗手であった人たちが最近、相次いで著作を刊行した。安丸良夫『「方法」としての思想史』(校倉書房、1996年)、鹿野政直『化生する歴史学』(校倉書房、1998年)、ひろたまさき『差別の視線』(吉川弘文館、1998年)である。いずれの著作も、なぜ民衆 を主人公とするのか、そして民衆 を描くためにはどのような方法が工夫されなければならないかを考察している。とともに、いま、近代日本の歴史像はどのように描かれるべきかについても提言をおこなっている。しなやかな思想と豊かな学識にもとづいて展開される思考は、多くの示唆を与えてくれ、歴史 の方法にとどまらず、歴史 を学ぶことの意味をも考えさせてくれる。

**牧野田 恵美子** (社会福祉学科教授)

乙武洋匡著『五体不満足』講談社 1998年

先天性四肢切断、つまり生まれつき手と足とがない著者は、「五体が満足であろうと不満足であろうと、幸せな人生を送るには関係ない。そのことを伝えなかった」と述べている。障害をもっていたからこそ彼は、「自分にしかできないこと」つまり、障害者が暮らしやすいバリアフリー社会を創ること、心のバリアフリーに貢献するため、そして「自分に誇りをもって生きていけるようになりたいと願って」全国を飛び歩いている。「障害をもっている、ボクは毎日が楽しいよ。」と記しているが、これは彼の両親、小学校の先生の教育そして障害者を特別視しないクラスの友達など周囲の人々の影響が、前向きで努力家な彼を形成したに違いない。障害者問題に関心のある学生だけでなく、自分の生き方に迷いや悩みを抱えるすべての老若男女に薦めたい一冊である。

**岩 木 秀 夫** (教育学科教授)

森嶋通夫著『なぜ日本は没落するか』岩波書店 1999年

他人に本を薦めることは食べ物や酒を薦めるのと同様、自分の生理的不均衡を白状することだ。シーズンオフの海水浴場に散らばるプレハブの残骸のような雇用秩序、政治秩序を前にして、経済合理性の観点から日本の雇用の普遍性を説く学説によって防衛されてきた私のちっぽけな自我は微塵に砕けつつあった。そのような私の脳に本書はコンピューターウィルスのようにとりつき、不眠症に陥れた。本書はあまたある没落本・ザマミ日本の類ではない。今から52年後の2050年に政財界の指導者層となる現在3歳、13歳、18歳層の受けている教育から2050年の日本の没落を予想し、それを避ける唯一の政治的イノベーションとして東北アジア共同体構想を提案し、そこから現在の教育課題を逆算して指摘している。実証科学としての社会学と価値定立・実現に関わる実践科学としての教育学をくっつけた半神半獣の怪物が教育社会学であるが、その王道の実践例でもある。

**峰 村 勝 弘** (数物科学科教授)

新入生のみなさんには、夏目漱石著『三四郎』(岩波文庫)を薦めたい。時代が随分違うので、今の状況・雰囲気と合わないかもしれない。しかし、大学へ入学して、新しい環境で色々な経験をしていくということでは同じではないだろうか。三四郎が自分の周りに現れる男女との交流を通して成長していく姿がとてもよい。より思想的なものとして、鮎川信夫・吉本隆明の対談集『詩の読解』(思潮社、1985年)を挙げたい。私の(密かに)敬愛していた吉本隆明の比較的わかりやすい対談集で、氏の情況に対する思想的取り組みを、詩人鮎川信夫が対談相手として上手に引き出している。最後に、石井宏編『モーツァルト ベスト101』(新書館、1995年)を紹介したい。この本には、モーツァルトの名曲の名盤CDが101枚リストアップされていて、モーツァルトや演奏家のエピソードがあちらこちらに書かれている。人生を豊かにする為に座右に置きたい本である。

## つかってみようインターネット(続々)

### どこへ行こうか

おさらいです。前は図書館のホームページにある「学外サーバ」を例に、リンクをたどり同じような内容の、あるいは関連した内容のホームページへ行き着くことができるという話をしました。この「学外サーバ」のように、関連分野のホームページのリンクを集めたものを「リンク集」と言い、関連分野のホームページを見に行く際のガイドブックにもなる、という話もしました。

今回は「リンク集」のようなガイドブックがない場合に、膨大な情報量のインターネットの世界から、どのようにして自分が必要とする情報(ホームページ)を見つけ出すかという話をしていきます。

### 情報を整理してから

自分の必要な情報(ホームページ)を検索するやり方として、自分が関心を寄せているジャンルについて、大きな「区分け」から小さな「区分け」へと絞り込んでいく方法があります。例えば、英国の小説家である「コナン・ドイル」の情報ほしい場合には、「コナン・ドイル」という人物について、

「コナン・ドイル」は英国の小説家だ。

「コナン・ドイル」は小説家だ。

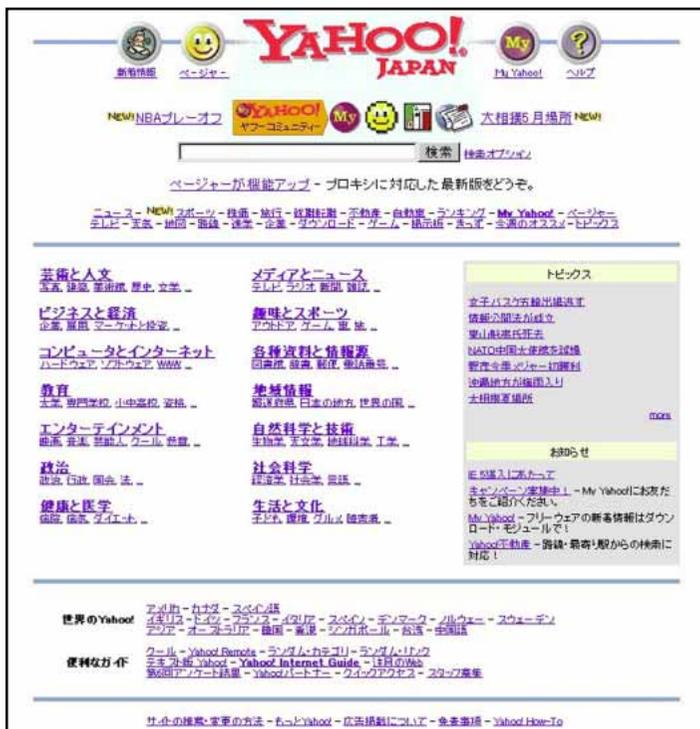
小説家だからジャンルは英米文学だ。

英米文学は文学の一部だ。

文学は人文科学の一部だ。というような把握の過程が出来る上がります。実際に情報(ホームページ)を探する場合にはその過程を逆にたどることになり、それが大きな「区分け」から小さな「区分け」へと絞り込んでいく方法になるわけです。

さて、ほしい情報(ホームページ)を探し出すための「区分け」はできたけれども、一個人でなにもない状態からインターネットにある膨大な情報(ホームページ)を「区分け」していくことは不可能と言えます。ではどうすればよいのか。実は「ディレクトリーサービス」という便利なものがあります。このサービスは「ジャンルごとにまとめた

図：Yahoo! JAPAN ホームページ  
ディレクトリーサービスの例として(1999.5.10 現在)



インターネットの目次」といえるもので、あらかじめ「区分け」が設けてあり、その「区分け」の下に様々なホームページがあります。このサービスを利用してインターネットから情報(ホームページ)を探し出すときには「区分け」をたどることによりたどり着くことができます。

実際の「ディレクトリーサービス」の例として「Yahoo! JAPAN (<http://www.yahoo.co.jp>)」を取り上げてみましょう。図は「Yahoo! JAPAN」にアクセスしたときに最初に開くページです。「Yahoo! JAPAN」の「区分け」の仕組みを簡単に説明すると、できあがったホームページを登録する際に「区分け」に従って登録を行うことでそれぞれの「区分け」の下にホームページを集めることができるようになっていきます。前述の例「コナン・ドイル」についてのホームページを実際に検索してみると「区分け」の過程が実感できるでしょう。

### いきなり検索

この章では、言葉により求める情報(ホームページ)を探し出す方法を説明します。

図書を見てみると、ほとんどが「目次」と「本文」と「索引」という構成で成り立っていると言えます。それになぞらえてインターネット上に存在する情報を「本文」とするならば、前章での「目次」に対してこれから話をするのは「索引」とみなすことができます。

言葉で検索する場合には、「～について(例として、「原子力発電」について)」の情報を探す場合には、その情報には「～」という言葉が含まれていることを前提としています。ですから検索した結果の情報(ホームページ)には、例によると「原子力発電」という言葉が用いられているということになります。図書で巻末の索引からその索引が記述されているページがわかるような感覚です。

これは「全文検索エンジン」を用いて検索する方法です。この仕組みをごく簡単に説明すると、登録されたホームページに用いられている「言葉」を検索の対象として検索します。「目次」による検索と異なるのは、「目次」が情報(ホームページ)の内容から検索を行うのに対して、「索引」は用いられている「言葉」による検索のため、実際に検索結果で現れた情報(ホームページ)が求める内容に合致するかどうか確かではないということです。例えば、例の「原子力発電」という言葉による検索の結果には、

原子力発電所の名称の一部

原子力発電災害

原子力発電設備

など、様々な内容が含まれることでしょう。求めていた情報(ホームページ)がその中の 内容であるのなら と は不要なものとなってしまいます。

### まとめ 探している情報を見つけるために～情報はどこにある？

インターネット上にある膨大な情報の中から必要とする情報を見つけ出す方法を説明してきましたが、上の二つの方法のどちらか一つを利用することで完璧に探し出せるという訳ではありません。むしろ二つの方法を求める情報により使い分けたり、また補完的に使用することで求める情報(ホームページ)を、確実に、漏れなく探し出すことが可能となってきます。どちらか一方の検索方法に慣れていくよりも、求める情報によってどちらの検索方法が良いかを判断する力をつけることが必要ということです。

おわりに、この3回の連載でインターネットの世界について簡単に述べてきました(つもりです)が、インターネット上の膨大な情報は世の中に存在する情報の一部です。インターネットは図書館・博物館・美術館などと同じように情報源の一つにすぎません。ですから「インターネットで探し出せないから、その情報はない」とは思わないでください。図書館も利用することをおすすめします。

(館員・閲覧係 鈴木 学)

## 情熱と理智の所産 『青木生子著作集』紹介

後藤 祥子

青木生子先生の著作集全十二巻が完成した。A 5 版平均 400 頁、総頁五千になんなんとする大著作集である。三期十二年にわたる学長の任期を満了され、少しはお暇もできたかと、出版社おうふうの狙いはまさに時宜を得た企画だった。学にも男も女もない、と口ではいうが、やはり著作集や全集という規模や形態は女性研究者にとって希有なことに違いない。それは何よりも研究者としてのスケールの大きさ、学問研究の普遍性と思考の豊かさを象徴する。後進わけても女性の学徒にとって、この壮挙がどれほど嬉しく誇らしく感じられたことか。それを裏書きする如く、各巻々には著者の研究教育史における愛弟子というべき十二名の研究者や教育者、ジャーナリストが絶好の解説を施し、それぞれの青春時代を豊かに彩った初版時のときめきを伝えている。

巻 1 から 5 までは研究書。巻 1 『日本抒情詩論』は昭和 32 年「記紀・万葉の世界」と副題して弘文堂より刊行された名著。戦時下一般の万葉集理解を想起する時、その同じ時代の空気を吸って培われたはずの著者の日本古代文芸研究が、かくも瑞々しくかつ先駆的に、日本文芸を抒情詩として見極めようとしたことに、改めて驚嘆せざるを得ない。著者にはこれに先立つ処女論文集としてすでに『古代文芸における愛』(昭和 29)があるが、次にのべる巻 2・3 『日本古代文芸における恋愛(上下)』(初版昭和 36 年、清水弘文堂)に発展吸収されたものとして今回は割愛された。さてその上下 2 巻だが、もともと東北大学学位論文の主論文であり、国文学分野で女性最初の、しかも最年少の博士号であったという。かねて研究の主題であった抒情の中核を恋愛に絞り、恋愛抒情詩としての日本古典の本質を闡明したきわめて明確な問題意識の所産であった。当時の書評に、文芸研究を通しての日本精神史として評判の高かったもの。巻 4 『万葉挽歌論』は昭和 59 年、塙書房の刊。抒情詩という課題の、恋愛に継ぐテーマとして、挽歌に的を絞ったセンスに、瞠目した記憶も新しい。時あたかも学長職第二期の初年度で、折から新潮古典集成の『万葉集』も最終巻を控えていた。変革期の、とりわけ日本女子大学にとって激動期の大学行政の要にあって、どういう時間の生み出し方をされたのかと思わず嘆息が出る。そういえば昔、先生は一日四百字三十枚をノルマにされていると仄聞した。苛酷な行政職は、この天性の真理探究者のペースを少しも乱すことは無かったと見える。第 5 巻『万葉の抒情』は本著作集によってはじめて一書となった最新の論文集である。昭和四十年代以降、著作集刊行直前までの、ということは取りも直さず、想像を絶する激務の中で、ものされた多くの論から成るのだが、額田王、人麻呂、坂上郎女、家持、とりどりの抒情の由縁を探り尽くして止まない粘り強い論理性は、静かな情熱とでも評すべき快い文体となって、俗事の喧騒をまるで寄せ付けない。そのような精神のバランスの秘密を、今回私ははからずも、「忙中の閑」(巻 11)という小さなエッセイに再発見した。八十周年の寄付勸進旅行の帰途、ひとり洛西の冬の夕景を辿る散策のとじめ、あだし野の景を「人生の年輪に刻みこまれた風景」と評すくだりである。かつて大学院生の同人誌『会誌』に寄せられたもの。

巻 6 『日本文学之美と心』7 『古典へのいざない』8 『女流歌人篇』は、高校生の教養雑誌『いづみ』に連載された古典講座、その発展として勉学に志しながら進学できない若い女性たちのための「大学講座」テキストなどを主に、学界の講座解説や研究余滴・随想から成っている。女学校時代の恩師への傾倒に端を発するこの社会教育での活躍は奇しくも、なまじな研究論文より作品そのものに就けと説く著者の、古典にさし向かう姿勢がもっとも端的に示された領域だといっている。9 『茅野雅子研究』10 『近代史を拓いた女性たち』は女子大にゆかりある女性先駆者たちの伝記研究。成瀬記念館蔵の手紙や諸記録を縦横に活用して、類のない貴重な業績となった。11 『明日の女子教育を考える』は学長講話や学園出版物への寄稿、12 『随筆・索引ほか』にも著者の自分史はもとより「忘れえぬ人々」など、豊かな出会いと別れの醸し出す滋味が余韻深い。(日本文学教授)

## 本 と 歴 史

新井 美香

私は幼い頃から公立の図書館にはよく通っていましたが、大学の図書館の印象はかなり目新しいものでした。第一に、専門書の多さには圧倒されました。年代物とわかる本が上から下へ、そして横へと無表情に立ち並ぶ様には一種の感慨を催されます。レポートで追われている時分には、この本がどれだけ頼りになるかは無論、言うまでもありません。

私はレポートで追われていない時分にも、よく授業の合間を縫って図書館四階に行きます。学校の図書館内でも一番落ち着ける、好きな場所です。史学科ともいうこともあり、歴史関係の文献が多いのもその一因になっています。しかし何より「自分の世界」を形成したがり、「本の中に閉じ込めりたがる」性質の私にとって、人が少なく敬遠されがちな四階はまさにうってつけでもあります。

さて、ここ四階に限らず本で囲まれた中の「静けさ」は一種独特なものがあります。人為的な騒々しさを物ともせず、本はただ静かに利用者の前に鎮座しています。本がその時代時代の考えの代弁者なら、本が醸し出す「重み」はそのまま歴史の重みなのかもしれません。すると本棚の前に立った時、私は築かれていった歴史と対峙しているのだな、などと四階の机に座りながら思いました。

大学図書館は公共図書館とは異なり、一般に開けていない分奥の深さと厚みを感じさせられます。専門書ばかりなのでとつき難い点もありますが、「調べる」行為に対しての心強さはレポートの際でもすでに立証されていると思います。

この図書館との付き合いも、まだ一年が経ったばかりです。気長に力まずに図書館と、本との時間を作っていきたいです。  
(史学科2年次学生)

## 私 の 図 書 館 考

関本 真紀

西生田キャンパスの図書館は、いつもすいている。混んでいるのは試験前くらいだ。おかげで利用しやすいが、同時にさみしくもある。よけいなお世話かもしれないが、図書館の利用費も学費として払っているのだから、どんどん利用しないと払い損である。

春の大学というのは食堂が混んでいる。グループ発表の相談をしようにも周りがうるさくて話もできない。そんな時のために、図書館には「グループ研究室」というものがあるのに意外と知られていないようだ。また、本のさがし方にもちょっとしたコツがある。日本女子大学図書館のホームページにはオンライン検索があるので、インターネットに接続しさえすれば、家に居ながら図書館の蔵書にあるかどうかわかる。日本女子大になくとも、学術情報センターのWWWにアクセスすればどの大学にあるかがわかる。あとは司書さんに相談すればよい。

私は本学図書館を含めて、5枚の利用カードを持っている。内訳は、地元の市立と県立図書館、そして新宿区立と渋谷区立の図書館である。近頃の公立図書館はその地に居住・通学していなくても利用カードを作ってくれる。それぞれに長所短所があるので、使いわけているつもりだ。お気に入りには新宿区立図書館で、ここはレファレンス係が親切で都立図書館の本もとりによせてくれる。大学の図書館は勉強するにはもってこいだが、蔵書が少なく、社会学系・人類学系の本なのに目白にありたりして、すぐには手に入りにくい。そういう本は案の定きれいで、利用度が低いことが解る。

図書館は施設だ。だから確かにハードウェアである。しかし、同時に司書がいて利用者がいてこそ存在するソフトウェアでもあるのだ。だから図書館は人が使えば使うほど賢くなれる。利用者のいない図書館など、ただの巨大な本箱にすぎない。本当は良い図書館ほど混んでいるべきなのだ。

(現代社会学科4年次学生)

## 司書教諭科目の変更について

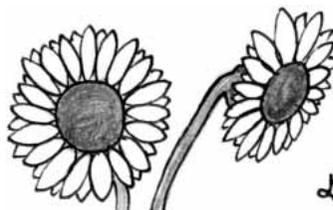
田中 功

昨年の司書課程の科目変更が続いて、今年度は学校図書館司書教諭講習規定の一部改正に伴い、規定科目が大幅に変更されました。これは新しい教育課程の展開や情報化時代の進展に対応し、また生涯学習時代に則した役割を果たすことのできる司書教諭の養成を目指したものです。

従来の司書教諭科目では主として学校図書館内の管理業務に関する知識に重点が置かれてきました。しかし、今後の司書教諭に求められる資質としては、個を大切にせる教育課程の展開とそのため資料活用との関連についての深い見識、児童生徒の豊かな心を育てていくための読書活動を一層充実させる力量、学校図書館の活用を通じて、児童生徒に情報活用能力を身につけさせる力量、などがあげられています。これらの点をふまえて今回の司書教諭講習科目が変更されることになったのです。

変更後の科目は次のとおりです。

- 学校経営と学校図書館（2単位）
- 学校図書館メディアの構成（2単位）
- 学習指導と学校図書館（2単位）
- 読書と豊かな人間性（2単位）
- 情報メディアの活用（2単位）



司書教諭の資格を得るには、従来は7科目8単位を修得することが必要とされていましたが、今回の改正ではこのように5科目10単位となっています。また司書課程の科目との読み替えが可能なのは7科目中5科目から、5科目中1科目（学校図書館メディアの構成）だけになりました。

さて本学では、今年度よりこれに沿って次のような形で授業が行われます。「学習指導と学校図書館」は通常の時間帯、「学校図書館メディアの構成」は司書課程の「資料組織概説」、「図書館メディア論」との読み替え、そして「学校経営と学校図書館」、「読書と豊かな人間性」、「情報メディアの活用」の3科目は夏期集中の授業になります。

（図書館事務部長・日本文学科教授）

### OPAC 講習会を開催

毎年新学期の5月～6月頃にOPAC講習会を実施していますが、今年もインターネット経由のWeb OPACの講習会を開催しました。図書館ホームページの「資料検索」により、日本女子大学の蔵書を検索する方法の講習会です。実施要領は、次のとおりです。

《目 白》5月・6月の月曜日～金曜日、一日二回（9:30～10:15 / 13:30～14:15）開催。

場所は2階OPACコーナーで。

申込みは2階カウンター（目白）まで。

《西生田》5月中の火曜日・木曜日（13:30～14:30）に、

電算演習室1で計5回開催、20名の方が受講しました。



編集後記 4月より新図書館長に就任された英文学科教授出淵敬子先生の巻頭言が始まりました。「今、学生にすすめる本」特集は継続いたします。前学長青木生子先生の著作集全十二巻が完成されました。国内研修等多忙中の後藤祥子先生に、紹介の執筆をお引き受けいただきました。巻頭のカットは、社会人となり図書館情報サービス課配属でスタートされた田代陽子さんによる。白いページに、これからいろいろなことが書き込まれてゆくことでしょう。図書館だより編集委員：田口令子、中島和子、陸川享子、水嶋寿恵、中澤恵子（田口）